

平成 28 年 10 月吉日

市民力・地域力を結集 グラウンドワーク三島の挑戦

(平成 26 年 7 月、静岡県内の高校で開講した都留文科大学出前講座の要約編)



都留文科大学特任教授

NPO法人グラウンドワーク三島専務理事

渡辺 豊博

目 次

はじめに

第1章

- 1 ボランティア活動は自分のためにやっている
- 2 グラウンドワーク三島の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」
- 3 グラウンドワーク三島の活動の哲学は「ミッション・アクション・パッション」
- 4 複雑で多様な社会問題を抱えるイギリス
- 5 イギリスではNPOや社会的企業で働きたい学生が多い

第2章

- 1 グラウンドワーク三島の多様な現場モデル
 - (1) 「水の都・三島」の原風景・原体験の再生と復活—源兵衛川再生物語
 - (2) 市民力・地域力を結集して清流の街がよみがえった
 - (3) 多様な再生活動への取り組み

第3章

- 1 活動の蓄積は社会変革への処方箋
- 2 現場での活動には社会の真理がある

はじめに

皆さん、NPO法人「グラウンドワーク三島」の詳細な活動については、グラウンドワーク三島のホームページ (<http://www.gwmishima.jp/>) をご覧ください。また、静岡県三島市の現場で実施している、各種の活動にも気軽に参加してください。

NPOやボランティア活動の実態や楽しさを学ぶためには、教室での座学的な専門知識を勉強しても、詳細な運営上のノウハウや活動現場の楽しさ、面白さ、辛さを知ることとはできません。実践的な活動と組織のマネジメントを学ぶためには、活動の最前線に自分の身を置かなくては、現実的な現場の「生きた知識」を習得することはできません。

まさに、グラウンドワーク三島の現場は、私が所属している都留文科大学文学部社会学科のフィールド体験の場でもあり、イギリスを発祥の地とする「グラウンドワーク」活動の日本における「ルーツ」でもあります。昨今注目されている、市民・行政・企業・NPOとの「パートナーシップ・地域協働」による地域再生や環境再生、NPOビジネスの「成功モデル」ともいえます。

本日の「都留文科大学出前講座」では、パワーポイントなども使用して、臨場感あるグラウンドワーク三島による現場での具体的な活動を、皆さんに紹介するとともに、NPOの新たな社会的役割と可能性についても講義いたします。



清流がよみがえった源兵衛川に立つ 渡辺 豊博 教授

第1章

1 ボランティア活動は自分のためにやっている

グラウンドワーク三島は活動を開始して、本年度で24年目になります。皆さんが生まれる前から活動をやっています。私自身は、ボランティア活動に関わって、すでに30年が経過していますが、「自分がボランティア活動をやりたい」から、飽きずにやり続けているだけです。

ボランティア活動に関わっている人は、よく「人のためになるから」やっているといます。しかし、私は、そのようには考えていません。自分のいろいろな「意思」やまちづくりに対する「夢」を実現するために、やってきたし、やっています。

自分がやりたいからやっていることが、結果的には、人のために役立つんだとの強い信念と確信を持ってやり続けています。「自分が楽しいから、自分がやりたいから」やっているのです。しかし、世の中、一人では、決して大きなことや困難なことを成就・解決できないので、活動への思いや夢を共有できる人たち・仲間とやっているんです。

とにかく、毎日、公私にわたり、忙しいのですが、精神的にはあまり疲れません。いろいろと問題が起こり、ひどく疲れ、止めてしまいたいと思うこともあります。仲間の何気ない会話や酒宴などを通して、疲れが消えていきます。

しかし、現実的には、私は組織の責任者ですから、自分がやめたいからと言って、そんなに簡単にはやめられません。責任者には、組織や活動を適切に運営管理して行く責任が伴い、いろいろな思いを持った人たちを動かしていかなくてはならない苦労や辛さがつきまといえます。

世の中は素直で善良な人ばかりだとは言い難く、正直言って、結構、意地悪で独り善がりな人もいますし、文句ばかり言って、何も動かない人もいます。しかし、よく考えてみると、三島の街を良くしたいと思う純粋な気持ちやグラウンドワーク三島の活動理念に賛同して集まった人たちですから、そういう人たちの意志や思いを真摯に受けとめながら、多様な人たちをマネジメントし、束ね、動かしていかなくてはならないのです。

このように、いろいろな障害や問題を処理、乗り越えていかなくてはならないのが、専務理事・事務局長の立場・役割です。矛盾した話ですが、結構、辛くて、嫌になっちゃうことが多いのですが、大変、面白い立場でもあります。皆さんも、クラブやサークルの部長、生徒会長、ボランティア団体の代表者などを担ったことがあると思うので、私の「心情」を理解できると思います。

2 グラウンドワーク三島の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」

とにかく、いろいろが楽しいので、自発的、主体的にボランティア活動に取り組んでいます。本会の合言葉は「右手にスコップ・左手に缶ビール」です。どのような意味だと思えますか。

地域や町内に課題や問題が発生した時に、行政や政治に文句や注文を言ったり、総論的で抽象的な議論ばかりをしているのではなく、市民自らが主体性を発揮して、スコップや鎌、ゴミ袋などを持って、現場に駆けつけ、無理をせずにできる範囲で、少しずつ課題や問題を解決していく、まちづくりの手法・考え方です。

作業が終わったら、参加者が集まって、ビールや飲み物を片手に、一杯やりながら「まちづくり談義」に花を咲かせましょうという楽しい発想です。皆さんは、高校生だからビールで一杯とはいきませんが、多様な人々・地域住民などとの交流は、人を元気にして、自発的・内発的な「市民力・地域力」を育成していきます。

皆さんも、ボランティア活動の現場に足を運ぶことによって、大人たちとのつながりをつくり、現実的な社会の実態を学ぶことができます。教室の中には、現実社会を生き抜いていくための物事への取り組み方や知恵、課題解決のための具体的なノウハウは、あまり存在していないと思います。

教室から飛び出して、ボランティア活動の現場に参加し、教室では学べない、「現場力・実践力・問題解決力・会話力」などを総合的に身に付けていただきたいのです。

3 グラウンドワーク三島の活動の哲学は「ミッション・アクション・パッション」

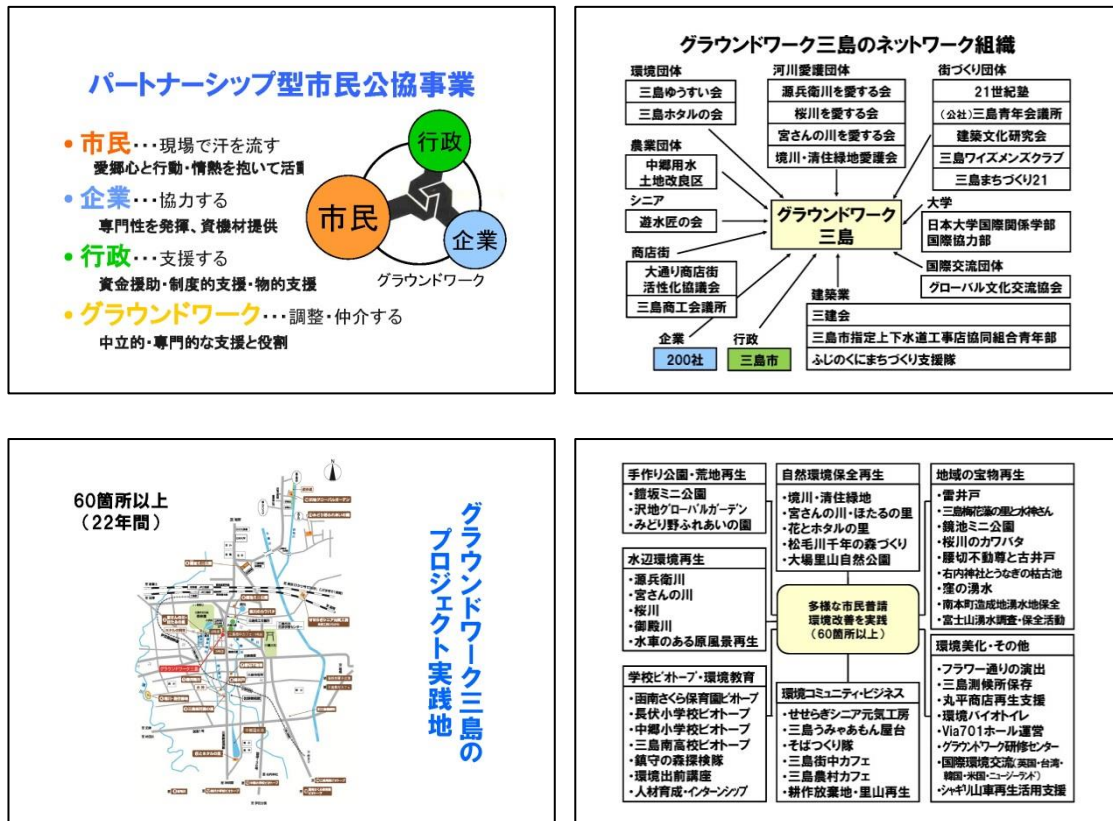
私は、以前、静岡県庁で働いていましたので、役所の実態・特性は知っているつもりです。役所の基本的な姿勢は、問題が大きくならないように、小さな問題ばかりに気を使い、結局、根本的な問題を迅速、適切に処理・解決することが遅れます。役所内部で会議ばかりを開き、現場においての即効的な課題解決・対策を講ずることができません。調整や検討、協議の時間ばかりが過ぎていき、現場での適切な課題解決には至りません。

グラウンドワーク三島の対応姿勢は、そのような中途半端で急場しのぎの生ぬるい対応や姿勢とは根本的に違います。まずは、市民自身の問題意識をベースに、具体的な行動を起こすことを、活動の「哲学・思想」にしています。余計なことは考えずに、まずは、現場に行って何かを始める、取り組むのです。

川のゴミ拾いから始めるなど、小さなことからでいいのです。川に蛍を飛ばしたいと思ったら、自からが蛍を育て、川が綺麗になるように水辺の環境改善活動を有志とともに始めるのです。とにかく、有志で課題を抱えた現場に行けばいいのですから、あまり難しいことはありません。自分が、大切だ、必要だと考えたことについて、自己責任を前提にして、実践し、物事を現実化していくのです。

グラウンドワーク三島の活動の哲学は、3つあります。まずは、「ミッション・理念」です。活動の方向性・目的・目標・信念・哲学・思想を明確にすることです。次は、「アクション・行動」です。とにかく、現場において実践・活動することです。最後は、「パッション・情熱」です。持続可能な活動の基盤は、一歩踏み出す「勇気」を持った人たちの熱き情熱が、活動の原動力・エンジンです。苦勞にめげない、強靱な忍耐力・精神力が、参加者の資質として必要になります。

これらの3つの要素が、有機的に結合することによって、多様な「相乗効果」をもたらします。社会や地域を変革していくための「処方箋」としては、この「パッション・アクション・ミッション」の哲学が、相互に連携・関連しながら循環すること、回り続ける仕組みをつくるのが、成功への「ポイント」になります。



4 複雑で多様な国内問題を抱えるイギリス

この「グラウンドワーク」とは、一体、どのような活動なのでしょう。1981年にイギリスで始まった国家的な市民運動であり、当時のサッチャー首相が新たな「国家システム」の構築を目指して始めた「パートナーシップ」の仕組みです。

市民・行政・企業・NPOが連携・協働して、お互いの立場と役割を理解・尊重しながら、相互の専門性を発揮し、複雑な課題を抱えた地域の生活環境を改善していこうとする運動です。行政や政治などに、一方的に依存するのではなく、市民の主体的な発意と具体的な行動をベースにした「市民主導」の運動ともいえます。

皆さんは、イギリスのイメージって、どんなものがありますか。ビートルズですか、ハリーポッターですか。今、イギリス国内での関心事、心配事は何だと思いますか。実は、10年前は中学生の妊娠問題であり、今は、小学生の妊娠問題です。さらに深刻な問題は、国内に蔓延・拡大している「エイズ問題」です。

イギリスでは、この10年の間で移民関係者が、200万人近くになったといわれています。いままで、移民の受け入れは、フランスが一番多く、次が、イギリスでした。毎

年、多くの移民を国民の合意のもとに受け入れてきました。しかし現在は、移民の受け入れには厳しい規制をかけ制限しています。移民に対する社会保障の負担に関しては、イギリスの大きな社会問題になっています。

イギリスには、マンチェスターユナイテッドのグラウンドを管理しているおじさんを国民が等しく尊敬する、身分に対して柔軟性のある価値観もあります。移民の増加に伴った犯罪の多発化や治安悪化、社会的負担増などに対しての批判や攻撃も増大しています。

これが、社会の「光と影」です。これらの深刻な社会問題の解決に苦しんでいます。緊縮財政の中で、多様な人々や社会の構成員によって、解決のための知恵やアイデアを出していかななくてはならない、厳しい状況に追い込まれているのです。今までの、行政の機能・能力・権限・制度などが限界・制度疲労を起こし、政治家の判断力の劣化を含めて、行政や政治依存の体質・考え方では、健全で安全な地域社会を維持していくことが難しくなり始めているのです。

例えば、エイズ問題解決への事例を紹介します。実は、マンチェスター市に廃校になった小学校がありました。街の真中にあったのですが、広い敷地周辺には人が来なくなり、寂しく、怖い場所になってしまいました。

その後、何が起きたかという、学校の周辺にある街路灯の下に売春婦が立ち始めました。車が通ると光の当たる場所に売春婦が立ち、お客を誘い、車は売春婦を乗せてどこかに行く。その辺りには、注射器や麻薬の袋が散乱するなど、結果的には、エイズ感染者が市内に蔓延・拡大し始めたのです。

皆さんだったら、この深刻なエイズ問題を、どのようにして防止しますか。驚くことに、イギリスのグラウンドワークが取ったエイズ対策は、売春婦に避妊薬や避妊用の道具、注射器を配ることでした。エイズに感染する最大の理由は、麻薬を注射するために注射器を使い回しすることです。注射器の使い回しを通して、エイズが人から人へと感染・拡大していくのです。また、1回打ったら注射器は指定の袋に入れ、注射器処理ボックスに捨てなさいと教育しています。この処理ボックスを各所に設置して、さらに、信じられないことに、注射器や避妊薬を売春婦一人ずつに配りました。

犯罪を取り締まる警察は何をしていたのでしょうか。警察は取締りを厳しくして麻薬常習者を犯罪者として逮捕し、刑務所に投獄していました。結果的には、犯罪者が一気に増加して、刑務所に入りきれないほどになってしまいました。刑期を終えれば、また、同じような犯罪を繰り返す、「負の連鎖」が続き、抜本的な解決には至りませんでした。

しかし、グラウンドワークは、売春婦に避妊薬を渡し避妊教育を施し、働くための基礎知識や資格を身につけさせ、就職先を斡旋し、売春婦にならなくてもすむように自立を促しました。街の商店のカウンターで働けるように訓練しました。これらの効果により、マンチェスター市を含め、イギリス全土でエイズ問題が激減していきました。

イギリスの国民は、行政が課題解決に対応することよりも、NPOがやろうとすることの方を信用する傾向・風土があります。グラウンドワークは、売春婦一人一人に会い、

危険性を説明して、注射器や避妊薬を渡しました。それらの人間的な対応が、売春婦や麻薬の売人、常習者の気持ちを変え、信じられないかもしれませんが、社会的な困難な問題が劇的に解決しました。

行政や政治の力だけでは、複雑で深刻な社会問題を簡単には解決することはできません。グラウンドワークって凄い役割を果たせるという、社会的な評価が沸騰して、一気に多額の寄付金が集まりました。社会的な課題は、行政だけの力では解決できないことを、このエイズ問題への取り組み姿勢の違いと社会的な効果を通して、イギリス国民が実感・理解したのです。

5 イギリスではNPOや社会的企業で働きたい学生が多い

このように、行政や政治の力だけでは、複雑化・深刻化する現在の社会問題を解決することは難しくなっています。また、企業が利益追求ばかりを優先しては、地域経済は豊かになれず、雇用の確保や就業の場も維持できず、若者が故郷に帰れず、地域社会は衰退していきます。

現代の日本社会は、NPOや社会的企業を含めて、多様な社会的サービスの担い手・提供者を必要としています。イギリスの大学生に希望の就職先を訪ねると、NPOや社会的企業で働きたいと答える学生が半分近くいます。都留文科大学の学生を含めて、日本の大学生のほとんどは、民間企業か公務員への就職を希望しており、活動の実態がわからない、NPOや社会的企業などで働きたいと希望する学生はほとんどいません。

皆さんは、将来、NPOや社会的企業で働きたいと思いますか。例えば、グラウンドワーク三島で働きませんかと私が強く誘った時に、素直に就職したいと思いますか。日本の学生には、NPOや社会的企業で働くという、イメージがまったくないと思います。NPOや社会的企業への就職を家族が簡単に理解してくれることも、ほとんどあり得ないと思います。

しかし、イギリスの学生は、基本的に、社会のために働くことによって、企業や公務員と見劣りしない給与を貰え、生活が成り立ち、家族を養いえることを前提として、NPOや社会的企業において働きたいと希望する学生がたくさんいて、競争率や人気の高い、憧れの花形就職先として高く評価されています。日本においても、今後、ますますNPOや社会的企業など、多様な社会的使命を持った、組織・会社・活動への関心と需要が高まってくると思います。

自分の能力を発揮できる場所を、企業や公務員など、限定的・固定的に考えないで、グローバルな価値観を前提に、自分自身の将来のあり方を模索してください。社会的に必要とされるニーズ、サービスが必要だと考えたら、既存の組織や会社に入ることを前提とするのではなくて、自分の能力と情熱で会社を創業・起業する意欲や発想を持ってください。若者の力は、無限大です。挫折と失敗を恐れず、夢の実現に向かって、挑戦してってください。至る所に「青山」あります。

第2章

1 グラウンドワーク三島の多様な現場モデル

(1)「水の都・三島」の原風景・原体験の再生と復活―源兵衛川再生物語

グラウンドワーク三島が、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と復活に取り組んだ、最大の理由は何だったのでしょうか。1960年代からの地下水の減少による「水の都・三島」の環境悪化の進行です。故郷の豊かな水辺環境が傷付き、川を愛した三島市民が、水辺再生への関心や意欲を失った諦めの現実が、グラウンドワーク活動に取り組んだ最大の理由です。

グラウンドワーク三島の活動の特徴は、議論や提案だけに終わらず、それらの解決の手段を具現化・実現化するため、具体的な解決方策を発意し、行動し、成果や実績を残すことを信条としています。「街は誰のものか、街の価値とは何か、次世代に残せる街の宝物は何か」など、各界各層の関係者が、課題解決に向けてさまざまな処方箋や方法論を立案していくのです。

現在、グラウンドワーク三島の活動が始まって、22年の歳月が経過しました。多種多様な活動には、地域再生の成功現場と社会的・教育的波及効果を内在しています。現在までに市内約60カ所に実践地が点在しており、具体的な環境改善地区は、施工前後の劇的な環境変化を生み出し、あわせ、地域総参加による「パートナーシップ・地域協働」の有益性と潜在力を地域住民に実証してきました。

平成4（1992）年9月、それまでにバラバラに活動してきた三島ゆうすい会や中郷用水土地改良区、三島青年会議所、三島商工会議所など、市内8つの市民団体と三島市や地域企業などが参集して、グラウンドワーク三島実行委員会（現NPO法人グラウンドワーク三島・参加団体20団体）を設立しました。

まさに、グラウンドワーク三島は、複雑に絡む利害者の「調整・仲介役」の役割を担い、地域の特性を熟知した上で、さまざまな「人間ネットワーク」を駆使した専門的能力と人材を有する「中間支援型NPO」といえます。こうして日本で最初のグラウンドワークが、「水の都・三島」の地域再生に向けて動き出したのです。

これまでの市民参加の総数は約20万人を超え、都市住民と農業者とが互いにスコップをもち、ビオトープづくりや田んぼづくりに汗を流し、その後は、ビールを片手に環境談義やまちづくりに話が弾みます。共有の場づくりのプロセスの中から、相互の考え方や関わり方が理解されていくのです。この交流のきっかけづくりを頻繁に企画し、仕掛けているのが、グラウンドワーク三島なのです。



湧水が豊かな源兵衛川
(昭和 30 年代)



汚れた源兵衛川
(昭和 35 年～平成元年)



再生された源兵衛川

(2) 地域力・市民力を結集して清流の街がよみがえった

「水の都・三島」の地域資源は「水と緑の豊さ」です。しかし、市街地を流れる川のほとんどは、土地改良区が管理する農業用排水路であり、その受益地は市街地の下流地域に位置しています。そのような水路配置から、三島市民が誇りに思い、愛する「水の都・三島」の水辺自然環境は、農業者の努力と資金によって支えられていることを、都市住民のほとんどが知りません。

さらに、悲しいことに湧水が減少し始めた 1960 年代以降には、都市住民が川を汚す最大の「加害者」となり、川にはごみが放置され、雑排水が垂れ流され、川は汚れ、三島の厄介者になっていました。当然、管理者である農業者と都市住民との感情的な対立も激化し、「加害者」と「被害者」との「対立の構図」が 25 年以上も続いていました。

その間、源兵衛川の管理者である中郷用水土地改良区では、維持管理の増大が過剰負担となり、自然河川の暗渠化による閉塞やコンクリート水路による狭小化、下流部にある中郷温水池の水質悪化や安全性への不安による埋土などが検討され始め、「地域資源」「環境資源」として自然度の高い源兵衛川が、環境破壊の危機をむかえていたのです。

・市民へのアプローチ

そんな膠着状態の中で、市民参加による源兵衛川の再生整備への取り組みが県や三島市から提案され、平成元（1989）年から平成 3（1991）年までの基本構想・基本計画の策定段階において、行政と市民・地域住民・NPO・土地改良区などとの徹底的な議論と検討が始まりました。

また、計画策定のプロセスにおいては、土木・建築・造園等からなる「設計者グループ」と「生態系アドバイザーグループ」、さらには、グラウンドワーク三島、地域NPOが一体となって関係地域に入り込み、環境情報や歴史情報の収集、事業内容の説明、住民意識の育成と景観情報の把握などを行い、事業計画の策定を進めました。

議論の中から、全長 1,500mの源兵衛川を「都市と農村を結ぶ水の道」をコンセプトとし、「原風景・原体験の再生」を基本理念とすることが合意され、農林水産省の「水環境整備事業」を活用して、護岸改修とともに「親水施設・修景・生態系復元・景観保全」を行うことになりました。

現況に昔からあるものは保全し、コンクリート化された護岸は、元の溶岩積みや土羽に戻して生態系の復元と景観保全を設計指針としました。3年間・延べ180回もの地域住民との話し合いを経て、平成4（1992）年に「源兵衛川親水緑道計画」が策定されました。事業区域を8ゾーンに区分して、それぞれの地域特性や環境特性を踏まえた、市民参加・市民主導の公共事業の事業計画が進められたのです。

・パートナーシップによる事業計画策定のプロセス

「市民」は、自分たちの創意工夫によって源兵衛川の整備計画と景観保全を立案し、昔のような自然度の高い川づくり計画や川の中を歩ける「親水緑道」を考えました。また、ゴミが散乱していた源兵衛川に入り、3年間にわたり地道な河川整備を続け、地域住民の汗と具体的な行動によって、昔の美しい水辺自然環境を取り戻したのです。

「行政」は、市民の計画案に従い施設を造りました。川づくりのプロセスの中に、自然観察会や勉強会の開催を企画するなど、住民参加の機会を意識的に増やすことにより、地域住民の思い入れとアイデアを取り込んだ「魂の入った川づくり」を進めました。

行政主導による一方的な「公共事業」の進め方から、市民やNPOの協働型「市民公協事業」への発想転換と新規手法の導入に取り組みました。三島市は、グラウンドワーク三島に対して、年間200万円の補助金を支出することによって、持続的に私たちの市民活動を支えてくれました。

「企業」は、グラウンドワーク三島の要請と市民の自助努力を評価して、源兵衛川の河川環境維持のための補給水となる、水質に問題のない「冷却水」を、湧水が減少する冬場に、1時間当たり200tから500tに増量供給してくれました。このことにより、源兵衛川に、一年中水が流れることになり、生態系が著しく再生・改善されました。

「中郷用水土地改良区」は、管理者としての権限（水利権、土地の利用権等）を強く主張せず、さまざまな市民の意見を尊重し、聞き役・脇役に回りました。親水緑道整備の条件として、「通水上に障害とならないこと、河川の美化が保持されること、将来的に安定的な用水源が確保されること」が要望されましたが、関係者との合意形成ができあがり、維持管理費も顕著に軽減されています。

「グラウンドワーク三島」は、利害者の橋渡し役となり、それぞれの立場と役割を尊重して、双方が連携するための課題や条件を調整する調整・仲介役の役割を担いました。具体的には、土地改良区の説得・組合員の合意形成、県・市との計画案・管理体制などの調整、企業からの補給水供給の交渉、地域住民の主体性の醸成、市民の水辺環境再生への意識高揚、水を活かした地域再生への商工業者の意識転換、地域資源としての環境情報・歴史情報の収集を体系的・総合的に進めたのです。

(3) 多様な再生活動への取り組み

・実践的な環境再生活動

グラウンドワーク三島によってコーディネートされたパートナーシップによる環境改善活動を通して、今では、多くの市民が憩う親水空間が、源兵衛川に整備され、ゲンジボタルやカワセミなどが生息する豊かな水辺自然環境が再生・復活しています。

グラウンドワーク三島は、これまでに、源兵衛川などの水辺再生をはじめとして、環境悪化で市内から姿を消した水中花・ミシマバイカモの復活、ホテルの里づくり、住民参加による遊水池の整備、歴史的な井戸・水神さん・湧水地の再生、お祭りの復活など、水辺にまつわる環境文化の再生活動を展開してきています。

また、活動の初期段階より、荒地の再生を図るため市民手作りによる公園整備を5地区で実施してきており、身近な環境改善をスローガンとするグラウンドワーク三島の典型的な事業になっています。さらに、環境教育活動の一環として「鎮守の森探検隊」による自然観察会の開催や「学校ビオトープ」の整備も推進し、保育園から高校まで、多くの子ども・若者たちの参加を得て活発な教育活動が行なわれています。

これらの事業の推進にあたっては、地域学習会やワークショップの開催等を通じて関係者の合意形成に多くの時間をかけ、地域住民が主体的に身近な環境を守り・育てる体制となるように促しています。

現在、当団体は20の市民団体（構成約5,000人）、100名以上の個人会員からなり、企業200社、三島市、地域ボランティア（延べ200,000人）等が参画し、それぞれのネットワークを活かした創造的な活動を多方面で展開し、これまでに三島市内及びその周辺地域において60地区以上で具体的な実践活動を展開しています。

これらの活動は、「右手にスコップ、左手に缶ビール」という明快で楽しいスローガンのもと、地域の多くの人々の実践的な参加により進められています。身近な生活環境の中で発生した地域課題に対して傍観者ではなく、積極的、具体的な形で取り組み、小さな成果を残すことで市民に自信を取り戻し、街への愛着の気持ちを醸成する「自立と自発への心の変革運動」といえ、「議論よりもアクション」「走りながら考える」がグラウンドワーク三島の行動指針・規範です。

・環境再生から地域再生へ

三島市においては、グラウンドワーク三島のコーディネートによる市民・企業・NPO・行政の協働による活動により、豊かな景観形成とまちの回遊性の向上や商業地域を中心とする景観整備が進み、平成17（2005）年度都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」、平成18（2006）年第7回「明日への環境賞」（朝日新聞社）、平成21（2009）年地球環境大賞「環境地域貢献賞」（フジサンケイグループ）を受賞するなど、「水の都・三島」再生に向けたまちづくりの実績が社会的に評価されています。

また、源兵衛川や三島梅花藻の里などの水辺散策に訪れる来街者や街歩きの観光客は

近年着実に増加しており、観光案内所に置いてある観光案内の「みしまっぷ」の発行枚数は、平成10（1998）年の5万部から、近年では30万部以上までになっています。

さらに、空き店舗が多かった中心商店街にも買物客が戻り、飲食店を中心に来客数も増加し、空き店舗がほとんど見られなくなっています。このように、水辺の環境再生から始まった活動は、「潤いのあるまちづくりからうるおいのある街づくり」へと地域振興の方向に拡大してきています。

歴史と文化の街・三島には、まだまだ未発掘・未発見の「観光資源、環境資源、地域資源」が眠っています。現在、グラウンドワーク三島では、商店主や農業者、大学生、若者、NPO、青年会議所、商工会議所青年部などとの協働組織を結成して、食育活動や地域ブランドの展開、中心市街地のにぎわい再生活動等、三島の魅力再発見の地域文化再生事業に取り組み始めています。

食育・地域ブランドの展開では、かつて栽培されていた「三島そば」を復活させる事業を始めています。市民ボランティアによる「そばづくり隊」を組織し、箱根西麓に点在する遊休農地を利活用したそば栽培を展開しています。収穫したそばは、箱根西麓産の地域ブランド「三島そば」として販売しており、現在販路開拓の強化を進めています。

また、中心市街地のにぎわい再生活動では、間伐材や廃リヤカーで製作したリサイクル屋台による「三島門前屋台村」イベントや、放置竹林の青竹の側面に透かし彫りを入れた「竹あかり」を市内のせせらぎ沿いに設置・点灯した「竹あかりイベント」を開催しています。

さらに、グラウンドワーク三島によるこれまでの活動成果をもとに、三島に訪れた人々に、三島の水辺自然環境やまちづくり等を説明・案内することのできる「エコインストラクター」「リバーインストラクター」「富士山湧水インストラクター」（計240人）を養成し、彼らが案内役になった、地域資源を活用した環境・まちづくり体験研修ツアー「エコ・スタディ・ツアー」を実施しています。

これまでに、源兵衛川の水辺ゴミ拾いツアーやちゃんかけ（茶碗の欠片）拾いツアー等を企画してきましたが、清流の川に入っただけのゴミ拾いは、参加者の評価も高く、終了後における地域住民や環境NPOメンバーとの「水談義」は、冷たいビールの味もひときわ美味しく、多くのリピーターが参加してくれています。



三島門前屋台村販売会



源兵衛川での「ちゃんかけ拾いツアー」

これらの活動は、各方面から大きな関心を呼び、現在では、年間約 2,000 人・約 100 団体が国内のみならず海外からも、グラウンドワーク三島の視察に訪れるなど、日本におけるパートナーシップ型の環境・まちづくり活動の「成功モデル」を情報発信する役割を担っています。年齢層も、大学生のインターンシップ研修生などの若者からシニアまで幅広い年代の交流の場にもなっています。

また、三島を拠点に国際的なグラウンドワークネットワークを構築しており、英国のグラウンドワークトラスト (<http://www.groundwork.org.uk/>) とは提携協定が締結されています。韓国とは、2004 年 5 月に、韓国江華島でバイカモの保護活動を進めている「韓国ナショナルトラスト江華バイカモ保護委員会」(<http://nationaltrust.or.kr/>) と環境交流協定を締結し、2007 年 2 月には、全国各地でバイカモ保護に取り組む環境団体と韓国ナショナルトラストメンバーが一同に会した「バイカモ国際サミット」を開催しました。

2008 年からは、日韓の小学生・大学生の若者環境交流を実施するなど、国内外における「バイカモ保護ネットワーク」が拡大しています。まちづくり活動の先進性がベースになり、欧米やアジアなどの海外の環境団体、まちづくり団体との技術交流や人材交流など、地域の草の根の活動をベースとしながらグローバルな活動も展開しています。



日韓バイカモ環境交流



日英グラウンドワーク交流

第3章

1 活動の蓄積は社会変革への第一歩



湧水が豊富だった頃の源兵衛川（1955 年頃）



水辺で遊ぶ子どもたち



湧水が豊富だった頃の源兵衛川と水車



桜川での洗濯

この写真は、昔の源兵衛川や水辺の風景です。皆さんのところにも、このような懐かしい、原風景がありませんか。今は、ないかもしれません、あるはずがない、いやいや昔は確かに、当たり前のようにありました。洗濯している2人のお婆さんは、すでに「千の風」になっていると思います。真中の娘さんは、多分、今は特別養護老人ホームにいる年代だと思います。そんなに古い写真です、ということを行っています。この写真の風景、右側のコンクリート壁のカーブを覚えておいて下さい。



満水の楽寿園小浜池



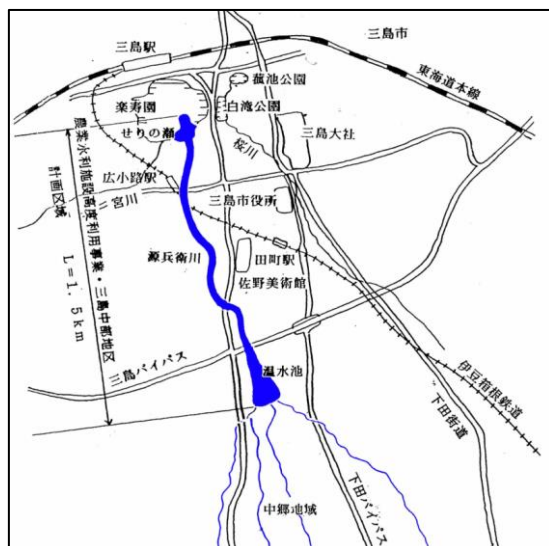
枯渇した楽寿園小浜池

この写真は、楽寿園小浜池の湧水池です。昔は、一年中、湧水がありました。この風景が当たり前だったんです。しかし、今では、湧水がなく、枯れてしまいました。皆さんは、昔と今の風景を見て、同じ場所なのですが、どのように感じますか。

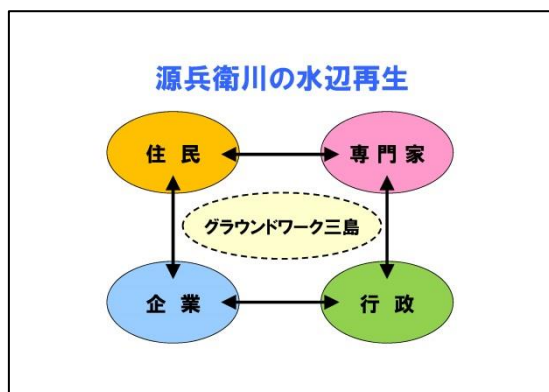
私は当時、まだ 35 歳前後で若かったんですが、この写真を見て、怒り心頭に達しま

した。「このままでは三島は終わってしまう、乾いた街になってしまう、三島が駄目になってしまう、「水の都・三島」の消滅だ、私たちが祖先から引き継いできた地域資源を失ってしまう、人間としての本音・本質性を失ってしまう」などの危機感、問題意識を持ったんです。今こそ、ここで立ち上がり、何とかしなけりゃいけないとの切迫した意識によって、新たな市民組織を作り始めたのです。

皆さんが関わっている、生活している故郷や町内でいいのですが、三島と同様の問題を抱えている場所・事例はありませんか。あるいは、こうなればいいなと思うような、川がありませんか。あるいは、里山はありませんか。森はありませんか。通勤途上でこうした方がいいなと思うような場所はありませんか。そのようなことを頭の中にイメージしていただだけませんか？



この図は、源兵衛川です。うなぎのような感じですが、街の真中を流れている農業用水路です。



この図は、グラウンドワーク三島が、住民、企業、行政、専門家の真中にある組織図です。住民…なんでも勝手なことや文句ばかりを言っている。企業…死んだふりしてどんだ地下水を揚げて金儲けしている。行政…前向きにやって後ろ向きに処理しますみ

たいなわけの分かんないことを言っています。専門家…自分の専門的なことしか言わない、他との連携がない縦割り。一つずつは重要で大切です。これらの真中にいて調整・仲介するのが、グラウンドワーク三島の役割です。



環境悪化が進行した源兵衛川上流部



清流がよみがえった源兵衛川上流部

この写真は、汚かった当時の源兵衛川です。昔、あんなに綺麗だった川に、雑排水が捨てられ、ヘドロが溜まっています。白いものが捨てられたゴミで、川の真中には油が浮いています。川の中に足を入れるとメタンガスが出ます。私の3人の子どもたちは、一緒にゴミ拾いをして音がしたなあと思ったら、周りがギャーと言って、長男は救急車で運ばれました。メタンガスを吸い過ぎたのです。足でヘドロを動かすとメタンガスが噴出してくるんです。私は大きいから、そんなことはありませんでしたが、子どもは小さいから思い切り吸い込み気持ちが悪くなりました。

こんな状態が26年間も続いていました。大人はひどいですね。あんなに素敵な川で遊び、子ども時代を送ったのに高度成長の中で、ふるさとで一番大切なものに、ゴミは捨てるは、ヘドロは流すは、ゴミ拾いもしないは、こんな悲劇が社会の現実の姿です。光もあるけど影もあるのです。

皆さんだったら、こんな汚い川を見て、どうやって綺麗にしようとしますか？忙しいからできないと言うんです。グラウンドワーク三島のメンバーは、私も含め、忙しいからこの活動に取り組んでいます。私は暇だったら、パチンコに行きます。昔はゴルフもやっていました。家族と頻繁に遊びに行きたいんです。しかし、行かずに、忙しいからやっているんです。暇だったらやりません。ですから、忙しいからできないは、不参加の理由にはなりません。



清流のバロメーター・ミシマバイカモ



源兵衛川で自生したゲンジボタルの乱舞

この写真は、清流を取り戻した源兵衛川の写真です。私たちは、色々な人たちの支援を受け、ゴミ拾いを地道に継続して、今の「清流」の姿を取り戻したのです。涙、涙の物語が、美しさの裏に隠されています。いろんな人たちの力と愛郷心を結集し、総力戦で難題を解決して、今に至ったということです。「夢」は人を成長させ、「無限の力」を育成していくことを示しています。

2 現場での活動には社会の真理がある

よくまあ、これまでの長い間、いろいろな困難や障害を乗り越えて、ここまでやってこられたと考えています。今、昔ゴミだらけだったあの汚れた源兵衛川で、たくさんの子どもたちが川遊びをしています。皆さん、現場の実態・現実の姿を確認に来てください。そして、ここで、ゴミ拾いを体験し、蛍の乱舞を見て、自然観察をしてください。源兵衛川の楽しさ、不思議が、肌で理解・実感できます。

グラウンドワーク三島の最大の目的は、次世代の子どもたちの「人材育成」です。市内の全小学生を対象とした実践的な環境教育となる、「環境出前講座」を10年以上にわたり開講し、毎年、2,000人以上の子どもたちを案内・教育しています。

今の時期は蛍が飛んでいます。昨夜は30匹以上飛んでいました。今後、その数は、どんどん増え、一番多い日には、一日に250匹近くが乱舞します。5月の初めから飛び始め6月中旬で終わりますが、全体で1,800匹以上が飛びます。

源兵衛川に行くには、三島駅から歩いて10分もかかりません。彼氏と彼女、元彼と一緒に見に来てください。私も毎年通っていますが、妻と一緒に蛍鑑賞していて、結婚後23年3ヶ月ぶりに愛妻の手を握りたくなります。「細くて妙に冷たい手だな」と思って確認してみると電信柱の足を乗せる棒のところをぽ一つと握っていました。

平成23(2011)年の6月11日に放映されたTBSテレビ“飛び出せ科学くん”で、「水の都・三島」の水辺自然環境を放映するために、中川翔子さんや柳原可奈子さん、大島麻衣さんが、三島に来てくれました。そのシーンの一つとして、源兵衛川での幻想的な蛍の乱舞が放映されましたが、3人とも大変、感動・感激してくれました。

自然発生の蛍の光の輝きは、人の心を和ませ、人としての優しさや思いやりの心を育てます。自然から受ける無言の教育は、とてつもない説得力があります。

このように、グラウンドワーク三島の多様な活動を通して、私にとっては、楽しい刺激的な「人生の時間」が、よどみなく流れていきます。

そんなことで、皆さんは、受験勉強やサークル活動で日々忙しいとは思いますが、素敵で幻想的な蛍を見に来ていただきたいし、グラウンドワーク三島の多様な活動にも、気軽に参加していただきたいと思います。活動と現場の中に、社会の「真理」が隠されています。長い時間、私の「都留文科大学出前講座」を聞いていただき、ありがとうございました。今後とも、いろいろなやるべきことに、地道に対応してってください。

(文責：都留文科大学文学部特任教授・グラウンドワーク三島専務理事 渡辺豊博)